

「ただで受けたのだから」

マタイによる福音書10章1～10節

聖学院大学 人事・経理部 財務課課長 倉橋 基

先ほど、司会者の方に読んでいただきました聖書の箇所には、イエスが弟子の中から12人を選んで使徒と呼んだこと、続けてその使徒たちを伝道の現場へと派遣したことが記されています。イエスはここまで、たった一人で会堂で教え、たった一人で御国の福音を宣べ伝え、たった一人で病気や患いをいやして来られました。けれどもここからイエスは、12人の弟子たちにも、神の国の収穫のために働く伝道者としての使命をお与えになりました。しかしながら、選ばれたこの12人は、他の多くの弟子たちよりも優れていたかと言うと、決してそんなことはありませんでした。選ばれた弟子たちの顔ぶれを見ると、何とも不思議な人選と言わざるを得ません。この選ばれた12人は、特別な指導力や才能を持っていたわけでもありませんでした。むしろ政治的、思想的、あるいは社会的な背景をみれば、あまりにばらばらでありました。ガリラヤの漁師、あるいはみんなから忌み嫌われていた取税人、また熱心党と呼ばれた、今で言うところの過激派の構成員、そして極めつけはイエスを裏切ったものまで「使徒」「遣わされた者」とイエスは呼んだ、とマタイは記します。イエスはこの12人をお選びになるにあたり、決して人間的な基準で選ぶようなことはなさいませんでした。主は、いわば一人ひとりを、そのありのままの姿で、神の国の働き人として選ばれました。主が「ありのままの姿」の弟子たちを愛して選び、呼んでくださり、そしてそこに新しい任務をお与えになったところから、神の国の到来を伝える、という一大事業が、主イエスお一人の業から、主に仕える多くの人々の業になる転換点となったのではないかと、そんなふう思うのです。

*

この主イエスの選びの記事を読みながら、私自身がこの大学に入学した頃のことを思い起こしました。今から20数年前、私はこの大学の学生でありました。私の学籍番号は「88P」ではじまりました。この聖学院大学は1988年の4月にできましたので、私はその第一期目の学生にあたります。

この大学に入る前まで私は、いわゆる「理系の子」でした。中学生の頃から理科室にこもってかなり怪しげな化学実験をしたり、また高校生の頃は生物部に所属してミジンコなど水中の微生物の観察などに没頭していました。大学に入ったら応用化学や生物学などを学びたい、いつかは理科の先生として教壇に立ちたい、そう思って理系の学校をいくつも受けましたが、いずれも私の入る余地はありませんでした。そして、最後に唯一受験した文系の学校であるこの大学に結果として入学を許され、そこに通うことになりました。したがってそのころの私は、大きな目的を失って、心が折れそうになりながら、日々を過していました。これからの4年間、どうやってすごそうか、これまで全く縁のなかった政治経済学なんて身につくのだろうか、そもそも文系の授業やレポートについていけるのだろうか、そんなことを

考えながら、毎日が不安であったことを思い出します。

しかししばらく後、このイエスに選ばれた弟子たちと同じように、新しい使命、この「できたての大学」を、学生の立場から作り育てていく、という新しい役割が自分に示されているらしい、ということが、だんだんとわかってきました。はじまったばかりの学校には、クラブはありません。学園祭也没有。体育祭也没有。そこで、同じ目的を持つ仲間を探し出して、その仲間たちと夜遅くまで議論しながら、クラブを作り、委員会を組織し、学園祭の企画を立て、無から有を作り出していく、ということの尊さを、この大学で教えられたように思います。またその時に得た仲間たちとの信頼関係は、今でも私の大切な財産になっています。本日の聖書の箇所では、12人が選ばれたあと、選ばれた弟子たちに向かって「失われた羊(=羊飼いのいない羊、の意味)のところにけ」というイエスの派遣のことばが続きますが、私自身が、この大学に入学した際、同じように、自らが「失われた羊」でありました。私は目的を失い、飼うものがない羊のように、この大学に入学しました。その私を主は見出して、新しい学校を新しい仲間たちと共に作っていく、という新しい目標を与えられた、そういう実感があつた4年間でした。

その後私はこの大学を卒業し、いくつかの職業や学校を経て、今度は職員として、再び聖学院と関わることになりました。10年近くを駒込キャンパスにある法人本部の経理局という部署で過しましたが、一昨年、本部と大学の統合に伴って大学キャンパスの経理部、という部署に異動になり、現在に至っております。

*

さて、聖書に戻りたいと思いますが、マタイは取税人でありました。人々から税金を取り立てる際に少し多めに取り立てておいて、お上に納税したあと差額を懐に入れる、という生活をしていて、とも言われています。したがってマタイは、お金の取り扱いについては、人一倍敏感だったのかもしれませんが。マタイによる福音書を読んでいると、「お金に関する詳細な記述」が随所に表れていることに気づかされます。私は現在経理部、というところおられます関係上、聖書を読んでいてお金に関する記述が出てくると、その部分が気になって仕方がありません。そもそもマタイ福音書自体、その他の三つの福音書と異なり、イエスの説教は説教でまとめられ、また奇跡は奇跡で、たとえ話はたとえ話で、というように、そのエピソードが時系列を無視して、形態分類で編集されています。これはマタイが、簿記で言うところの「仕訳」が得意で、聖書を記す際にその出来事を、旧約聖書の成就、という明確な意図を持って「仕訳」した結果ではないか、と思うのです。また、この後イエスが弟子たちを派遣する際、並行記事であるマルコやルカの福音書では単に、銭を持っていくな、とだけ記されておりますが、マタイ福音書は明確な意図を持って、「財布の中には金、銀または銭をいれて行くな(新共同訳では、金貨も銀貨も銅貨も持つな)」と記しています。マタイは実際の通貨の名前を挙げ、平たく言えば500円玉も100円玉も、いや10円玉ですら持っていくな、と金額指定までして、詳細にお金のことを記載しております。マタイは相当お金にこだわっていたのではないか、そう思うのです。そのお金にこだわり続けていたマタイは続いて、イエスの言葉を次のように記すのです「ただで受けたのだから、ただで与えるがよい(8節)」。

この言葉も、他の三つの福音書にはいずれも出てきません。マタイだけが記している言葉です。福

音書は恐らくはイエスの周囲にいた弟子たちがイエスの言葉を聞き取り、それが福音書記者に伝わって書かれたと考えられています。何よりもお金が大事だと考えていた時期があったマタイにとって、イエスの語ったたくさんの言葉の中から、この「ただで受けたのだから、ただで与えよ」という言葉は何よりも印象に残り、それをあえて書き残したのではないかと、思うのです。

*

私たちはこの大学で「授業料」という名前のお金を支払って、その反対給付として手に入れるものも、たくさんあります。しかし同時に、生きていくうえで大切なものの中には、ただで受けることが相応しいもの、あるいはそもそも値段のつかないもの、プライスレスなものがあることを、私たちは知っています。使命や役割、出会いや友情、そして人を愛すること……。ただで受けたこれらのものについては、ただで与えるべきだ、そうイエスは語ったのだ、とマタイは記します。もちろんこれらのものの中には、お金によって手に入れることが可能なものもありますが、それをお金で手に入れることは、私たちが神に愛されるものとして生きる際に、本当に相応しいあり方なのでしょう。

「ハーバード白熱教室」で有名なマイケル・サンデル教授は、あるものが「商品」に変わるとき、何か大事なものが失われることがあるのではないかと、という観点から、お金で買えないもの、お金を介入させるべきでないことは何か、について、さまざまな分析を試みっていますが、その中で愛について、「愛は、使ったからといって減るものではなく、実践することによって拡大する可能性がある」ということを示唆しています。彼は、愛しあう二人が、いつか愛を使うときが来るかもしれないと考えて愛を蓄えておきたいと願い、生涯にわたって互いに相手のためにほとんど愛を使わないとしたら、この二人ははたしてうまく行くだらうか、という問を設定しています。

私たちに恵みとして神から与えられた愛は、はじめから無償でありました。そしてそれは、イエスによって実践されました。その結果、その「無償の愛」から派生した、出会いや友情をはじめとするさまざまな「愛から生まれる贈り物」は、すべて神からの贈り物として私たちに「ただで与えられた」ものとなりました。この神からの贈り物は、一人ひとりの必要に応じて、神が備えてくださるものとなりました。わたしたちもまた、神から「ただで受けた」この恵みを、「ただで与える」ことができるよう、共に祈り、共に歩んでいきたいと願うものであります。

(祈り) 選びと派遣の主なる御神。今朝もわたしたちを、この清らかな礼拝の場へと選び出し、召してくださいましたことを、心から感謝いたします。あなたが決して相応しくないわたしたちを、ただあるがままに愛し、罪赦して、この交わりにお招きくださいましたことを覚えます。あなたのみ言葉の糧を霊の養いと、神の国の使者として、それぞれ与えられておりますこの世へと、あなたの平和の祝福をたずさえてお遣わしてください。私たちのこの群れが、ただ集められた群れでなく、遣わされたものの群れとなることができますように。主イエス・キリストによって祈ります。アーメン

2012年6月22日 聖学院大学 全学礼拝